

諸田 龍美（中国文学）

白居易恋情文学の研究

本論文は、中国や日本の文学史上の大きな存在である白居易の文学を、「恋情」（恋愛・感情）という視点から体系的に考察したものである。本論文の提出者は、白居易文学の本質を「多情な官能の詩人」とし、この観点から、同時代の中唐やそれ以後の中国文学、また日本将来以後の平安や江戸時代文学に与えた影響について総合的に分析を加える。

全VII部、各論 11 章から成る本論文の構成は以下の通りである（副題は省略した）。

序論 I 総論（1 恋情の復権）II 中唐の恋情文学（2 中唐における艶詩の流行と女性、3「欧陽詹」事件から見た「鶯鶯伝」の新解釈）III 白居易の恋情文学と『詩経』（4『白氏文集』における『詩経』の非諷諭的受容、5 諷諭詩に見る「情」と「倫理」の矛盾）IV「長恨歌」新論（6「風情」考、7 好色の風流）V 恋情文学の展開（8 北宋「蝶恋花詞」の主題と風流、9 多情と物のあわれ）VI 中唐恋情文学の史的位相（10 中国における「恋情」文学の展開、11 中唐恋情文学と国文学の展開）結論 VII 資料「元微之崔鶯鶯商調蝶恋花詞」訳注

この中で、特に第3章の論文は、同時代に発生した「欧陽詹」事件から「鶯鶯伝」に新解釈を加えており、第III部の4、5章の2編の論文では、従来淫歌として貶められてきた『詩経』の鄭歌が、白居易にとっては故郷の情歌としてあったことを初めて指摘した。このほか、第IV部の「長恨歌」新論においても、本論文の提出者は、ともすれば「長恨歌」のみの表現解釈に偏りがちであった従来の通説を再検討し、「風情」の真義、中唐の美意識という観点に立ち、中唐の「恋情」文学の展開について論述した。

このように、「恋情」という文学普遍的^{キーワード}の鍵語から白居易の文学を考察する本論文は、関連作品を通じ、中国の中唐のみならず、時間と空間を超えて、その影響を追究しようとする。即ち、第8章の北宋「蝶恋花詞」の考察や、第10章の中国における「恋情」文学の展開がそうであり、また最終第11章では、^{ふうりゆう}風流・^{いろごのみ}好色・^{もののあわれ}多情という相互に対応する文学用語の比較を通して、日本文学における「恋情」の展開をも展望しようとする。

以上に概述したように、本論文は「恋情」という観点から白居易文学の本質を洞察しようとしたものであり、論述の随所に、従来には無かった新しい知見が見られる。日本文学の引用と叙述には今後検討の余地があるとはいえ、本論文は、多くの優れた先行研究が蓄積されている中国・日本の白居易研究界に新たに加えられた研究業績として評価できる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分であると認めるものである。